

# 有機農業が切り開く 持続可能社会

ふくづのうえん  
福津農園

まつざわ  
松沢

まさみつ  
政満

環境の良さでマスコミにとり上げられることも多々あるが原則は曲げない。いくら高名や高価を提示されても不特定多数は相手にしない。宅配便で遠くに送ることもしない。

こうした営農を理解し支えてくれる人がゆつくりではあっても確実に増えていることが、私の有機農業のやり甲斐であり生き甲斐である。でも、個人や地域の仲間の努力だけではあまりにも牛歩である。

人類が今のままの生活様式を続ける  
と近代文明社会は破綻する！ 35年前  
に有機百姓を志して帰農したときは、  
破綻は漠然とした恐れだったが、今は  
確信できる。裏付けとなる情報があふ  
れ、異常気象を日常的に体験している  
から。日々更新される情報や体験を基  
に私の有機農業観や技術も変遷した。  
農業の本質に沿いつつより持続可能性  
の高い方向を目指した結果、不耕起栽  
培や半栽培が主流となり、農産物を近  
くの消費者に直接手渡しできる営農形  
態になった。農のユニークさや味、自

幸い、世界的に見ても有機農業は急伸しているし、遅れている日本でも有機農業推進法ができた環境保全型農業直接支払交付金の交付も制度化された。でも社会の持続不能化のスピードに対抗しきれない。特に日本の農業界の大半は今もって持続不可能な農業に邁進している。目先のお金のために将来世代へ負の遺産を蓄積し続けている。何とかならないか！

## 有機朝市



豊富な品揃えは、自給率を高め、  
市場も楽しく活気づく

いのちなでいちば



料理から環境まで話は多彩で、熱がこもる



生産者も消費者も子連れが目立ち、  
やる気・元気がでる

危機の打開策の第一歩は、より多くの人が持続可能な理想的社会像を共有することだろう。

そこで私は国際連合（国連）の動き

に注目している。国連は世界中の叢智を集め、データ・統計を駆使して将来を予測し、より好ましい持続可能な社会像を議論し、描いている。持続可能

社会を達成するのに必要な指標の一つとして持続可能な開発目標（SDGs）を2015年の国連総会で採択した。同じ流れの中で国連はその前年の2014年を、「国際家族農業年」と定め普及に取り組んだ。しかし当時日本の農政は「大規模な強い農業」を目指しており、広く衆知されることもなかった。農協の感度と対応も鈍かった。

一方SDGsは大規模気象災害の多発等社会の持続可能性への危機感が顕在化したこともあって、「流行」と言われるほどに各界で取り上げられ実践されつつある。報道の切り抜きファイルもみるみる厚くなる。片田舎の小百姓の私でさえSDGsフォーラムに招請され参加した程である。

SDGsの流勢に背を押されたか、2017年国連は2019〜2028年を国連「家族農業の10年」と採択した。さらに国連は2018年12月小農と農村で働く人びとの権利に関する国連宣言（小農宣言）を採択し、持続可能な社会の地盤としての「小規模・家族農業」の重要性を衆知し、普及充実を図っている。

時間的余裕が無くて上意下達の観は否めないが、国連の場で世界中の国や地域の代表が集い議論して合意した全世界の人が共有すべき持続可能社会像



# SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

世界を変えるための17の目標



**SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS**  
2030年に向けて  
世界が合意した  
「持続可能な開発目標」です

がSDGsとして呈示されている。17の目標を総合的に見ると、持続可能な社会を支える持続可能な有機農業像も見えてくる。

持続可能な社会を望む人はSDGsに照らして我が道をチェックしてみたらどうか。特に持続可能社会の基盤を担うべき農業関係者には、将来世代に支持されるか否かの分岐点であることを気づかせ、進むべき道の指標を呈示してくれるだろう。

SDGsフォーラム2019（名古屋）への参加を機にSDGs17の目標に照らし合わせて福津農園の実践をチェックしてみたのが後述する「SDGs17の目標 福津農園の実践」である。将来世代に負の遺産を残さない楽しくて持続可能な有機農業を目指した実践なので当り前とは言え、17の目標に違背していないことが確認できて安堵した。見方を変えると、世界中の人が共有する持続的社会的理想モデルとも言えるわけだ。SDGsに関しては、多くの有名企業が「我社はこんなに多項目の目標に向って事業展開しています」と一面に近い新聞広告を打っている。全目標に沿う仕事をしている循環型の有機農業者は、もっと誇りと自信を持って有機農業を主張して良い。社会全体も有機農業的暮らしを目指すことでSDGsに近づき、持続可能な将来

社会像が見えてくるだろう。

人類が行使できる科学のデータ、知識、技術の量は今まで以上にAI（人工知能）や5G（第5世代の超高速通信網）等によって急拡大している。これが人類の経済偏重の欲望と連携して自由、平等、成長を錦の御旗に、グローバルな自由貿易を基調とする文明社会を形成している。

一方、人類の身体の発達や心のあり様の変化・発展は小さく緩やかだ。人格形成の基となる人の人たる由縁の感性や命の欲求は、その多くが五感をもって地域風土と交わる体験を通じて生まれ育まれる。同じ風土で育った人は、何事にも共感し合え、力を合わせて問題に対処し安心できる個性的な文化を持つ地域社会を形成することが多いのもその証でしょう。人類の心身と同様に緩やかに変化する地域風土に制約されて形成される地域文化社会の中で、人は心身共に安寧の暮らしができる。しかし経済的欲望が形成してきたグローバルな文明社会は、安寧な暮らしに必要な地域文化社会を崩壊させるだけでなく、誘発した自然環境破壊、地球温暖化、格差社会等により、すべての生命の欲求を満たすべき条件を減耗しつつある。

グローバル化を必然とする文明社会とローカル化する文化社会の折り合い





条件不利と言われる山間傾斜地を多品目、不耕起農法で克服し、作物は有機朝市で食べてもらいたい人に顔を見、言葉を交しながら手渡しする。福津農園と2戸の新規有機就農者でこの地の農を維持している



江戸中期に建てられた築300年余の家に住み、これから先もずっと持続可能な農業や社会のあり方を有機農業しながら考える

をどのようにつけ、調和した持続可能社会を志向するか、人類の真価が問われている。  
私は地域風土に密着して生きる有機循環農業を選択した百姓として、すべての生命の安寧を保障する共存・共生の社会を希望する。私の視点で見ると、経済志向の強

い国連のSDGsには改善を求めたい点が多くあるが……。いかなる社会であっても、農と食の重要性は変わらない。現世の人、後世の人、人と共生する生き物みなにとって、健康で幸福な社会の地盤として求められる農業とは？生まれ育った山間の地

福津<sup>ふくつ</sup>という福<sup>みなと</sup>の津で思い巡らせながら、大好きな農業に打ち込む。生涯元気でこの仕事を続けたいと思う。その結果として希望に満ちた若い世代と同伴の道を楽しく進めたら嬉しい。

## 農業の本質

自分の農業をデザインするとき、経済より農業の本質を基本に置いて農法や技術を採用し、持続可能性を高めるよう工夫している。

|    |           |                                                                                            |
|----|-----------|--------------------------------------------------------------------------------------------|
| 原点 | エネルギー獲得産業 | 農業は一義的に、太陽光エネルギーを作物バイオマス（食料）に転換し、人類の利用可能なエネルギーを獲得する産業。                                     |
| 原理 | 共存・共生・循環  | 生物多様系で持続的農業システムを稼働するための基本原理。物質や命が循環する共存・共生の場としての農業を具現。                                     |
| 原則 | 食の安全      | 食の安全は原則。表示すべきは食の不安全化要因（農薬・GM技術）。食の安全は付加価値とする有機JAS制度や有機農産物の世界基準の価値観が食と農の危機を助長する。            |
| 特質 | 外部生産      | 外部生産は農林業の特質で、その産物は人類の福祉に貢献する（農業の多面的機能、外部経済）。農業の工業化は外部生産を無くし、地域農業の歴史的外部生産物資産（自然・文化）をも破滅させる。 |



# SDGs 17の目標 福津農園の実践

流通改革として農家が主導する有機朝市を運営し、恩送りや物物交換等で有機農業仲間の順・不調を調整する心がけや仕組みを推進している。消費者の経済的貧富に関わらず、食べてもらいたい人に食べてもらえる売り方や農産物価格を心がけている。農家の自給力をつける風土に適した多品目生産で農家、農村、地域、国と自給力が高まり、グローバル経済に左右されない健康で心豊かな生活や文化の基礎が固まる。生命デザインの農に依る生業は経済の<sup>たが</sup>箍を外し、格差を無くす決め手となる。



一級河川の流域自給を目途に、エネルギー、生命、物質が循環する農業を目指している。種子も地域の伝統種や在来固定種を採用している。その遺伝子多様性により、地球温暖化がもたらす気象変動や生態系変異にも耐性が強い。多品目少

量生産も温暖化リスク軽減につながる。結果的に極貧や飢餓<sup>きが</sup>がなくなる。不耕起農業では省エネしながら何種類かの作物や可食動植物が同じ場所で同時にできるので飢餓リスクの抑制にもつながる。収穫物は美味で栄養分が豊富。



有機朝市。食べてもらいたい人に食べてもらえるしくみとして35年続き、産消共に増えている。3世代同伴も多い



福津農園で行った豊橋有機農業の会の収穫祭。子供から老人まで多世代が集い、有機農業の世界を満喫する

本来、農業には食料など主産物の外に外部生産物がたくさんある。外部生産物が多ければ多い程複合的に機能して、教育力、福祉力を発揮し、かつ生態系豊かな風景をつくるなど人の暮らしに役立つ農業となることを知って、豊かな外部生産のある農を心がけている。農業の多面的機能とか、農業の公益という概念で広く認知され行政支援も進んで来た。農業に関わる生き物の良好な健康と福祉への配慮は、良好な食や自然環境となって人に還る。安全美味な食、信頼し合える人、農的生態系が調和するオーガニック社会を広める。







鶏の解体。鶏に草をやりその後屠殺して解体し、旬の野菜と一緒に薪で炊いてスープにして食べる。楽しみ、悲しみ、葛藤し、料理で味わう。農と食の原点。命のつながりを体感する。



小規模・家族農業ならではの循環の要である養鶏。子供は草やりしながら鶏と交流するのが大好き。親子で何を感じ、話してるのかな？



田んぼの土はツルツルしていて、冷たくて気持ちいい。自然の田んぼには生き物がいっぱいだね

## 農業の外部生産を 教育にも生かす (自然体験教室)

日本の教育界ではESD（持続可能な開発のための教育）活動も含め知育が重んじられているが、「人の人たる由縁の感性」を育てる環境づくりがおろそかである。そこで福津農園は、まちの人に農園を開放し、人と人、人と自然生態系生物との調和的共存・共生に必要な感性を育み、知的好奇心を抱かせる農業をデザインし、実践している。人は社会生活をする事で個の弱い闘争力を補い動物界を生き抜き、文化や文明を築いてきたし、かつ地球上に人と共存する生命体を食して生きるのが「人の性」故に。教育の原点たる体験で五感を鍛え、感性を磨き、知的好奇心を発芽させる。

小さな家族農業は、各担い手の個性や特技を十分に活かして協力して成り立つ。ジェンダー不平等など、言ってもやってもおれないし、意味も無い。有機農業仲間と主催する有機朝市には、有機農業の精神を大切にする事を条件に福祉施設が農福連携による農産物や加工品で出店している。持続可能で、心体力やジェンダーに関わらず、生きがいと幸福感のある社会像を皆で共有し、実現するための方策を現場で具体的に探りつつ実践している。

4 質の高い教育を  
みんなに



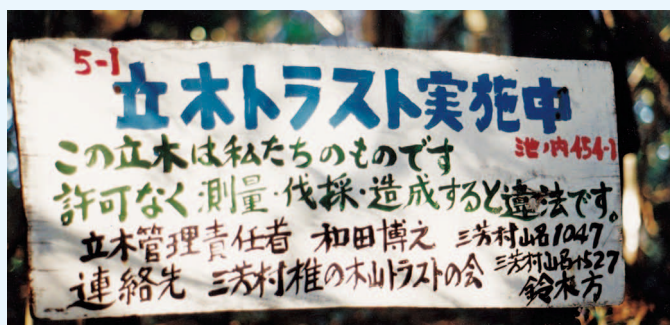
5 ジェンダー平等を  
実現しよう







立木のオーナー制  
子連れの新オーナーと一緒に名前と所有権移転の日  
付を書き込んだ



千葉県三芳村でのゴルフ場建設に反対する人たちの  
立木トラスト看板



福津農園を訪れたナミビアの官僚と名古屋大学院の職員・  
院生の皆さんが、福津農園の不耕起省水型営農やトイレの  
水循環の話を熱心に学んだ

1984年、私が有機就農したとき、福津農園の裏山にゴルフ場建設計画が進んでいたが、福津農園で始めた「立木のオーナー制」が功を奏し、マスコミが多く取り上げてくれて、ゴルフ場問題を全国的にアピールできるようになり、当地のゴルフ場建設計画は中止になった。やがて「立木のオーナー制」は市民運動と合体して「立木トラスト」へ発展し、全国の山や川、野生生物たちを乱開発から守った。水循環を考え、人の生活のあり方を見直す契機になったと思う。

ゴルフ場、産廃処分場等大金のからんだ地域のしがらみに対抗して計画を中止させ、自分たちの山からの飲み水を守った。下流域の水を守るために有機農業という生き方を選んだ。トイレも糞尿に水を混ぜず、発酵させて液肥にし活用している。水を使いながらきれいにする農業の特質を生かして農園の物質循環を全うし、かつ営農コスト削減も果たしている。糞尿液肥を待ち受ける作物や草の根、微生物、虫がいっぱいの畑の土は最高の浄水システムである。

植物の葉はエネルギー、生命、物質の循環システムの中核であり、機能とデザインも最高のソーラーパネルである。共生菌、太陽光、水、空気、土があればどこでも機能する。農業は植物の葉を活用して太陽光エネルギーを人が利用できるエネルギーに変換させるエネルギー獲得産業である。故に一義的責務としてエネルギー収支の良好な農業を設計し、実践している。緑葉はCO<sub>2</sub>を吸収し、O<sub>2</sub>を出す。効率の良い水の蒸散で空気を冷やし、木陰をつくる。死して尚動物や微生物の餌となる。美しくもありがたき事この上無し。

## 6 安全な水とトイレを世界中に



## 7 エネルギーをみんなにそしてクリーンに





## 8 働きがいも 経済成長も



持続可能な農と食と社会の基盤たる小さい有機農業を家族で実践すれば、自分のやりたいうことと社会的義務が一致し、自ら働き甲斐や生き甲斐が感じられる。何でもお金で計る価値観をやめるべく心がけている。経済成長は必ずしも人類の安全保障や福祉に直結しない。農業の本質に沿った持続的有機農業の外部経済は農業経済以上に大きく、その恩恵は、私に幸福をもたらしてくれるし、公益として地域社会にも貢献している。

## 9 産業と技術革新の 基盤をつくろう



地域の自然風土に合った持続可能な農・食・社会の基盤整備こそ最優先すべし。その上で文明思考（志向）から文化思考（志向）への転換が必要。経済と利便を優先して考えた目標は、生業の本質を見失い不慮の不幸を招くことがある。例えば、農業でみると、「インターネットで得た、地域の自然風土を無視したグローバルではあっても安直な知識と技術」の行使は、地域文化との軋轢を生み、格差や紛争の種となるでしょう。これを国レベルで実行すると文化国家の体を成さなくなるでしょう。

## 10 人や国の不平等 をなくそう



お金で平等を計ってはいけません。命や幸福はお金では買えない。必要な食糧、エネルギー、水や自然生態系福利を誰でも享受できる社会基盤の整備として小さい家族農業による持続的農林業を実践している。お金のしがらみをいったん横に置き、命との関係性を優先する農や生活を35年心がけたことで、小さいが確かな地域経済が活性化し、地域の産消に関わる皆との楽しい暮らしが実現した気がする。地域の不平等克服にコモンズの発想は有効で、地域の先人が築いた仕組みと知恵を大切にしている。

## 11 住み続けられる まちづくりを



自然との調和を優先する農法や営林方法の小さい家族農林業で山間集落を再生し、農林業インフラを保全している。草木の多面的な活用を図るため、地形地質に適合した多様な草木を配置している。山間の条件不利を克服するために取り組んだ不耕起農法が結果的に無施肥や少施肥栽培を可能にし、堆肥用の芝刈山が不要となった。雑木林の適切な管理で、山の保水力や防災力と共にまちの人の魅力度も向上した。不耕起農法は耕起の省エネのみならず、「堆肥」に関わる資材やエネルギー環境を大きく好転し、地球環境問題解決の方向性を打ち出せた。一級河川流域を生命地域とし、人類平和の課題を自分事として対処している。







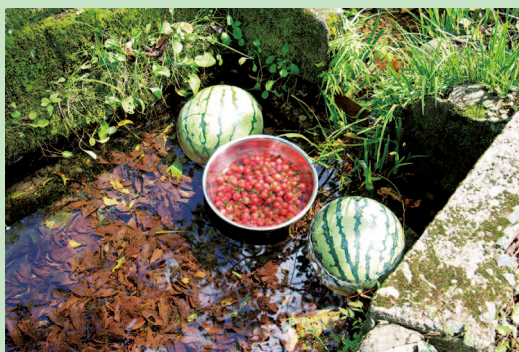
平畝でも水につかることのない畑



団体の見学受入



イモリ



湧水を利用して、ひんやりおいしくいただく

防止策…気候変動に鋭敏な農  
の役割を認識し、農業をデザ  
インしている。エネルギー収  
支の良好な農法や流通から食  
べ方まで具体的に考え実行し  
ている。不耕起農法、半栽培、  
旬産旬消、地産地消等々。対  
応策…多品目少量生産、加工  
保存、自然選抜による育種、  
種採り等で年間販売品目は  
200余。生育が不揃いな在  
来種で多品目を少量ずつ時期  
をずらして不耕起栽培し、極  
端な気象変動と病虫害のリス  
クに対処している。

農業による環境負荷を無くす  
ことで間接的に海を守ってい  
る。少ない水は無施肥農法  
で、ダム不要の農業を確立し、  
ダムによる海への悪影響を排  
除。もちろんダム建設の反対  
運動もしている。先人が目先  
の利得で考え建設されたダム  
や河川工事を改め、半世紀前  
まで山間の福津農園の泉や田  
まで海から上ってきたウナギ  
やモクズガニを回復させるの  
が目標である。不耕起栽培や  
半栽培の農法は、農園の生態  
系に優しいだけでなく、水循  
環を良くして土壌流出を防  
ぎ、川や海の豊かさを守る。

12 つくる責任  
つかう責任



自然の理を尊重・優先し、農  
業の本質から外れない営農で  
人と自然生態系生物との共  
存・共生を図り、つくる責任  
を果たしている。つかう（食べ  
る）人との交流（朝市での直  
販、学習会、農園開放等）を  
企画運営し、相互に共有する  
理想的な持続可能社会像の実  
現に向けて協働している。農

園内に入る太陽光エネルギー  
を草も含めたバイオマスに変  
換し循環させ、農産物バイオ  
マスとして農園の外に出荷す  
る。持続可能な社会像を共有  
し顔の見える人が責任をもつ  
て農産物を使う（食べる）仕  
組みを確立している。農園で  
は生ゴミとして廃棄される食  
料等はない。

13 気候変動に  
具体的な対策を



14 海の豊かさ  
を守ろう





## 15 陸の豊かさを守ろう



有害と言われる生物の排除を常識とする農を止め、全ての草、虫、微生物たちと共存・共生し、調和する環境を整える農法を実施している。排除の論理から共存・共生の論理への転換・整理である。山間傾斜地でも営農可能な農法を工夫することで、新規就農者呼び込み、山や川の保守を可能にした。食や保健医療に活用できる在来の野生植物群の回復と保全と活用を図りながら農村を活性化し、人類の福祉に貢献する産業づくりに着手している。有機農業は陸の豊かな生態系の回復と共に予想以上の経済力も結果している。



きれいな水  
さわやかな風  
みどりの風景  
田舎の風景  
生まれる

福津農園  
新城市利字福津38

## 16 平和と公正をすべての人に



自然風土に大きく規制される地域文化は個性豊かが当たり前で尊重されるべき。地域文化の基盤たる農と食も地域の自然風土と調和した持続性が求められる。小さい家族農業で農家・農村、そして、国の自給自立ができれば、紛争は自ら治まる。そう信じて、そう願って、小さい家族で地域の人の笑顔と信頼をもらえる農業をしている。個性豊かな地域文化や人の人たる由縁の感性を育む農、食、自然環境を尊重し創造する国策抜きで世界の平和と公正はない。百姓として、生物多様性豊で、調和のとれた農園をまちの人に開放し、農業や自然を体験してもらっている。人に限らず全生命の安寧を保障する農業の小さいけど確かなモデル創りを目指して。

## 17 パートナリーシップで目標を達成しよう



物の一生の最後まで責任のつけない輸出をして、物量とお金で世界均衡を図る発想はやめてほしい。食はもちろんエネルギーや自然資源や人口等の問題も自給自立を達成するために、内発的に発生防止や解消の策を練り努力するのが文化的自立国家の最優先すべきこと。その一助として、百姓たる自分のやるべきことは何かと考え、実践している。自給自立である。個で解消し難い課題は集団で、地域で、国で協力して事に当り、自立を図る。利他的利益を求めて拡大する輸出入の便利さ、物的豊かさの代償は大きく、負の遺産となる。





中央の柿の木の下手前に野菜とイタリアンライグラス、  
左下にカラムシなど野草、左上に鶏舎。

この写真は秋（10月17日）の  
福津農園の不耕起農法の畑の風  
景である。柿が熟す木の下は、  
雪<sup>せっぽく</sup>白<sup>はく</sup>体<sup>たい</sup>菜<sup>さい</sup>と大根にカラムシやイ  
タリアンライグラスなどの野草  
の緑葉で埋め尽されている。全

ての植物が総動員で日光を無駄  
なく分け合い活用して土を肥や  
し、野菜を育て、果実を甘くし  
ている。人やカラスやヘタムシ  
ガ等々の大小多種多様な動物が  
この植物を食べて命をつなぐ。

その背後には、小さくて人の目  
には留まらないが、数で圧倒す  
る微生物がいて、動植物の生命  
活動の足りない部分を補ってい  
る。自然界に無駄な命は無く、  
全体総合で調和している。

百姓もヘタムシ早生柿（ヘタ  
ムシ食害で早く熟した柿）を食  
べ、消費者にも説明して食べて  
もらうしくみをつくる（有機朝  
市など）。さらには熟柿を干し  
柿にしたり柿酢に加工する。生  
食だけでなく、味、栄養、保存性  
等で食を豊かにできる。お零<sup>こぼ</sup>れ  
は家畜も首を長くして待ってい  
る。野菜はもちろん貴重な食料  
だ。草は鶏などの緑餌となる。  
ここでは土が雨で跳ねること  
も、水にけん濁することもなく、  
傾斜地だが流出しない。作土は  
水持ちが良いのでどんな乾天が  
続いても施水したことがない。  
施肥も不要。このような風景を  
つくる農は、農家の食、資材、水、  
エネルギーの自給力を高め、ひ  
いては地域、国の自給力をつけ  
るので、争い事は減る。  
SDGs 17の目標を網羅する  
福津農園を代表する農の風景。  
読者の皆さんにはどのように見  
えましたか。



まつざわ まさみつ  
松沢 政満さん

昭和 22 年新城市生まれ。昭和 45 年静岡大学農学部卒。  
日本食品化工（株）で 14 年間研究開発に従事。昭和 59 年 脱サラして愛  
知県新城市に U ターン帰農。有機循環農業で現在に至る。田畑約 1.5ha、米・  
大豆・野菜・果樹・山野草・キノコ・鶏卵・加工品など多品目少量生産で  
自給自立を目指し、年間約 200 品目を販売している。  
就農年内に豊橋有機農業の会の仲間と始めた有機朝市と近くの消費者への  
宅配など顔の見える関係の中で販売している。  
現在、日本有機農業研究会理事、豊橋有機農業の会会長、あいち有機農業  
推進ネットワーク代表を務めている。就農当初から環境保全活動に関わり、  
ゴルフ場や産廃処分場、ダム等の問題の学習会や反対運動。農業・自然  
体験学習、有機農業研修生の受け入れ、講演、農園の解放等で持続可能  
な農と社会を実現するための活動をしている。  
第 15 回環境保全型農業推進コンクール農水大臣賞（2010 年）